

保育場面における感覚統合理論を基盤とした遊びの実践

代表者：伊藤 信寿(リハビリテーション学部)

連携機関：宇野 富子(社会福祉法人住吉会 幼保連携型認定こども園 小豆餅ゆすらうめこども園)

1. はじめに

現在は子どもを取り巻く環境が大きく変化している。国土交通省(2013)が行った「都市公園及びその他の講演における遊戯施設等の設置状況」調査によると、ゆりかご型ブランコや、回転塔、シーソーなど動きのある遊具が顕著に減少している。その背景には、老朽化以外に、多くの子どもがそれらの遊具でけがをしていることが大きな原因となっている。動きのある遊具は子どもの神経系の発達を促し、調整力を培うには最良の遊具であると述べている(文科省運動指針、2012)。しかし、事故も多く、設置者の責任問題に発展するケースもあり難しい問題であり、2002年には文部科学省からの告知・通達もあり幼稚園や小学校からも姿を消している。

そのため、今回は感覚統合理論(Ayres, 1972)(以下SI)を基盤とした室内で安全に行える運動プログラムを企画・実践することを目的とした。

2. 方法

1) 対象

協力園である小豆餅ゆすらうめこども園の年長クラスの20名である。

2) 方法

場所：小豆餅ゆすらうめこども園の多目的室

内容：こども園の園児に対しSIを基盤とした遊びを実施

提供者：代表者と学生ボランティア4名

実施期間：2023年2月と3月に1回の計2回実施。

3) 感覚統合理論

SIは自分自身の身体の情報や周囲の情報(感覚刺激)を上手く整理して取り入れることが苦手で、混乱している方に対して、遊具や様々な感触を得られる玩具等を使用して、感覚情報を上手く整理して適応行動を引き起こすことを目的とした療法である。例えば、光や音に非常に過敏なため、過剰に反応し落ち着きをなくしてしまう子どもや、触覚が非常に過敏なため、物に触れない、人との接触を避けるような過剰な防衛反応を示す子ども、逆に触覚が鈍麻なために、ボタンや紐の感触がわかりにくく、上手くボタンをはめられない、靴ひもを結べないといった不器用な子ども。あるいは、高さやスピードに対して非常に鈍麻なため、高所のような危険な場所に行きたがったり、過剰に動き回る子どもなど、感覚刺激に対して過剰に過敏あるいは鈍麻なために、問題行動を引き起こしている子どもが少なくない。このような子どもに対して、遊具等を使用して遊びの中で楽しめる感覚を提供することにより、子どもの感覚情報処理機能の成熟を促し、苦手な部分を育てていくことを目的としたものがSIである。

また、SIは発達障害や診断はないが支援が必要な子どもへの治療として効果が立証されている(岩永ら、2014)。

3. 結果

1) 参加者

年長クラス 20 名が参加した。

2) 実施内容

下記の活動を 30 分程度実施した。

① スクーターボード

主に前庭感覚刺激や固有受容覚刺激が入り、姿勢やバランスの発達に影響する。

② 毛布そり

主に前庭感覚刺激や触覚刺激が入り、姿勢やバランス、身体図式の発達に影響する。

③ 毛布ブランコ

主に前庭感覚刺激や触覚刺激、圧迫刺激が入り、姿勢やバランスの発達や、情緒面の安定等に影響する。

④ オタマを使ってボール運び

力加減や移動のスピード調整など、運動コントロールの発達に影響する。

3) 園児の様子

遊びの内容は、初めての体験の園児が多く、怖がる園児もいたが、保育士や学生と一緒に乗ることで、徐々に慣れていった。また、運動能力や運動企画を要しない遊びであったため、園児も楽しく参加していた。しかし、特に前庭感覚刺激が苦手な園児もおり、刺激の強度や大人が抱っこして乗るなどの工夫が必要であった。

4) 保育士の様子

保育士にも入っていただき、遊びの体験を通して、刺激となる感覚を感じてもらった。粗大運動やスピード、バランスを要する遊びが苦手な保育士もおり、刺激の感じ方（過敏や鈍磨）により、園児に提供する遊びも異なるため、良い体験になったと感想をいただいた。

4. 考察・結論

現在は子どもを取り巻く環境が大きく変化している。国土交通省（2013）が行った「都市公園及びその他の講演における遊戯施設等の設置状況」調査によると、ゆりかご型ブランコや、回転塔、シーソーなど動きのある遊具が顕著に減少している。その背景には、老朽化以外に、多くの子どもがそれらの遊具でけがをしていることが大きな原因となっている。動きのある遊具は子どもの神経系の発達を促し、調整力を培うには最良の遊具であると述べている（文科省運動指針、2012）。しかし、事故も多く、設置者の責任問題に発展するケースもあり難しい問題であり、2002 年には文部科学省からの告知・通達もあり幼稚園や小学校からも姿を消している。

日本スポーツ振興センター（208）の調査によると、全国の幼稚園・保育園で子どもが、けがをしたケースの半数以上は、頭部や顔のけがである。それらの原因は運動経験が不足していることも要因の 1 つであると報告している。また、文部科学省（2011）によると 3 年間にわたり、全国 21 市町村で体力の向上への基礎づくりを行った実践園と、意図的に行わなかった協力園での幼児の生活習慣・運動習慣の確立及び体力の向上などの調査を行った。その中で、幼児の身体的な体力と、精神力及び社会性との深い関係性が報告され

ている。このように、幼児期における運動は、身体面の発達のみでなく、精神面や社会性における発達にも影響を与えられとされる。

現在の遊びの環境の変化に対し、室内や狭い空間でも可能な SI を基盤とした遊びを保育士が体験し、普段の保育の中で実践することにより、子どもたちの運動機能の発達の促進が期待できると考える。

5. 今後

園の協力を得て、園で行える運動面、精神面や社会性の発達を促すことを目的としたプログラムを作成する。それと同時に、保育士に対し SI を基盤とした子どもの発達の視点に関する勉強会を開催し、子どもの運動面、精神面、社会性における理解を深める。さらに、考案したプログラムを実践し、その効果についての研究に繋げる。